

におい (ベトナム歩道 第10回)

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	245
ページ	66-66
発行年	2016-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003020

連載 ベトナム歩道

これまでベトナムを歩いていると、北部、中部、南部を問わず、いろいろなにおいがあった。昔ながらの市場に行くと、生きた鶏・アヒル・魚を捌いて売っている店、牛・豚の肉塊を切り分けて売っている店、フォーやブーンといった汁麺など各種お食事処、干しエビなど海産物の干物、山盛りの干しシイタケや、シナモン、スターアニスなどの香辛料、ニョクマムなどの調味料、色合いの濃い各種ドライフルーツなど、さまざまな商品を販売する店が集まっている。それら商品が発する独特のおいだけでなく、手当たり次第に客に声をかける店員、荷を担ぎ、急いで狭い通路を通り過ぎていく人達、自身も含めた買物客の汗、吐息、熱気、残り香も入り混じり、ねっとりした濃密なおい立ち込める。ハノイやホーチミン市で市バスに乗車中もそうだ。そこにはにおいがあった。ある日、車体の揺れや短い間隔でぐるぐる回るルートにバス酔いして、若い女性が嘔吐した。同女性が下車した後、傍で立っていた乗客は吐瀉物を跨いで自然に腰かけた。また、街では路上で各種生活ゴミと格闘する清掃の人達の姿があった。

地方に調査へ出かけた時も様々なにおいがあった。村役場のトイレに行くと、時に壁のシミに隙間があるだけの場所もある。においで確かにその場と確認できるが、どこに向かってもすばいのか一瞬戸惑う。大便の場所を覗くと、少し汚れた便器の真ん中に立派なものが置かれていることも。流すのは無理と判断したのだろうか。中国との国境に近い北部東部地域では、ベトナムのフランスパンに具材を挟んだバインミーを毎朝食べた。やや小ぶりのバインミーにタレを塗って炭火オーブンで温め、ソーセージが焼

き肉そしてキュウリ、香葉を挟んで店の人が渡してくれる(一個一万ドン、滞在時一ドル約二万二〇〇〇ドン)。通学前の小学生、仕事前の大人たちに交じってバインミーを待つ間、通りを行き交う客を誘う美味しいにおいに包まれて何度も唾液を飲み込んだ。

同地域ではこんなおまけも。仕事を終えてハノイへの帰路。マイクロボスの運転手が鬼の形相でハンドルを握っている。途中、客引き兼車掌役の男性とともに、道路脇で客を待つ行商人とグアバの値下げ交渉に夢中になるわ、バス停のない場所では意中のバスを待つ人達を何とか乗車させようと交渉に夢中になるわで失われた時間を取り戻そうというのだろうか。ジグザグ走行で次から次へと同じ車道を走る車を抜いていく。車内では見知らぬ者同士が運命を共にしながら、こもった微妙な空気に身を浸していた。

北部西方地域では、少し奥地に入った際、帰りが遅くなって、周囲が闇に包まれた。薄暗くなった視界のなかにいくつかの高床式住居がぼんやりと浮かんでいる。灯りの下で過ごしている人達がうらやましく感じられる。密度の高い空気に包まれ、風が運ぶ土地の木々草花のにおいに五感を研ぎ澄ましながら、宿所の方角に向かつて土の道を歩き続けた。

中部高原地域では、調査地に入ると、庭先のところどころで収穫したコーヒー豆が干してあった。あの独特のコーヒーのにおいは焙煎によってはじめて出てくるものとのこと。においでは何が干してあるのか分からなかった。一日の仕事を終えて宿所に一旦帰り、食事に出て戻ってくる、宿所脇で営まれている焼きせんべい屋に引き付けられた。大ぶりのベトナムせんべいに甘辛タレを塗り、炭火であぶって客に出す

その店は、なんとも香ばしいにおいに包まれていた(一枚五〇〇〇ドン)。そのにおいに誘われて何度も寄り道をした。パリパリとした食感がおいしさを引き立てた。

南部メコンデルタ地域ではバイクで一時間かけて指定された宿泊地から調査地に通った。調査地に辿り着くと村役場に直行し、待ち合わせた責任者の案内でインタビュースタッフ先に向かう。昼食はいつも村の食堂だった。丸いお皿に盛った白米の上に豚の焼肉かもしくは黄身を固めに焼いた目玉焼きと少しの野菜がのったシンプルなもの。ペットボトル入りのランブータンのジュースをつけて二万ドン。暑い中でも食べやすく美味だった。昼食後は午後三時に備えて村の診療所二階のスペースで休憩。汗をかいてベンチに座っていると、心地よい風が吹き抜ける。風は周囲に植えられた特産の緑色の文旦や庭で栽培された薬草などのおいを包んで運んできた。

においについてはこんなことも。今回のベトナム滞在中、テレビを観ていて次のような防臭剤のコマーシャルが流れた。危機に陥った人を現場に居合わせた人が捨て身で助けるのだが、気絶したその人物が目覚まして命の恩人のにおいを嗅いだ途端、大きな悲鳴を上げるのだ。

生物が生きている場所には、さまざまなにおいがある。筆者がベトナムに関わってから二〇年余り。現在の日本に比べて多様なにおいが許容されているように感じてきた。無論有毒な場合は例外であるが、近代化・都市化が進行する中で、多様なにおいに対するベトナムの人達の懐深さが失われていくなら寂しい。

(つらもと みのる/アジア経済研究所前在ベトナム海外研究員)